

懇話会構成員意見と対応方針

項目	該当資料		構成員意見	回答・対応方針
	資料名	ページ		
調査工程	資料1	1-3	<ul style="list-style-type: none"> 河床材料調査等の物理環境調査について「表2-1 今年度の調査項目と実施工程」に追記すること。(竹林委員) 	<ul style="list-style-type: none"> 別添、資料1の1-3とおろし、資料を修正。また、別添、資料2の2-1も同様に修正。
調査	資料2	—	<ul style="list-style-type: none"> について、種数は減っていないが個体数が少なくなっており、水域の確保が重要と考える。(上田委員) に移植した種を保全するためには、植生遷移を防ぐ管理が必要だろう。(渡部委員) 	<ul style="list-style-type: none"> について、調査と合わせて可能な範囲での維持管理を引き続き行う。
	資料2	—	<ul style="list-style-type: none"> トンボ類の成虫調査では貴重種が多く確認されるなど良い結果が得られていたので、資料本編にも成虫調査の内容をもっと記載していただきたい。(上田委員) 	<ul style="list-style-type: none"> 別添、資料2の2-33のとおり、資料を修正
	資料2	2-32	<ul style="list-style-type: none"> 掲載されている写真について、液浸標本になっているように見える。調査のために個体を殺していないか。(養父委員) 	<ul style="list-style-type: none"> 現地で採取した個体については、生きたまま写真撮影を行い、その後、速やかにもとにあった場所へ戻している。誤解のないよう、別添、資料2の2-32のとおり、資料に注釈を追記した。
	資料2	2-32	<ul style="list-style-type: none"> R5のについて、表5-11と表5-9で確認時期が異なる。どちらが正しいのか。(和田委員) 	<ul style="list-style-type: none"> 別添、資料2の2-32のとおり、資料を修正(表5-9の誤記を修正)
調査	資料2	2-47 2-48 2-50	<ul style="list-style-type: none"> R5の調査結果について、例年に比べて確認個体数も多く、新規個体も確認され、巣からの離散幼生も見つかっており生息状況は概ね良好といえる。今年は40~50cm程度の若年個体も確認されていることから、生息地で繁殖がなされており、一部の個体が生育しているのは間違いないだろう。 一方で、初期の頃に確認されて調査用にマーキングされた個体について、確認されなくなった個体も多く、元々の生息地からいなくなっていると推察される。一部は出水時にダム湖から下流に流されてしまっていると推察される。今後はダムの存在によりダム堤体より下流には流されないが、楽観視は出来ないと思う。(岡田委員) 離散幼生は確認されているものの、成長した幼生や30cm前後までの若年個体がなかなか確認されておらず、順調に再生産が行われているとは言い切れないので、継続して調査していただきたい。(岡田委員) 	<ul style="list-style-type: none"> ご意見を参考に引き続きモニタリングを行う。
	資料2	—	<ul style="list-style-type: none"> 出水によりがダムより下流に流れてしまった場合、ダム下流側では繁殖も期待できず、寿命を全うするだけなので、下流で確認された個体は上流へ移動させたほうが良い。ただし、近年、との交雑種の問題が各地で広がっており、緊急保護を行う際は遺伝子検査等の確認をしたうえで、保護した方が良い。(岡田委員) 長期的な保全の観点では、下流域のモニタリングも必要なのではないか。(和田委員) 	<ul style="list-style-type: none"> 下流域について、環境DNA調査によるモニタリング調査と並行して、捕獲調査の実施を検討する。また、下流で個体が確認された場合、マイクロチップの有無を確認し、マイクロチップが埋められた個体はダム上流域からの流下個体と判断し、ダム上流への移動を検討する。識別番号の無い個体については、外来種か在来種か確認の上、外来種の場合は、交雑の観点から、学識者に相談の上、対応を検討する。

項目	該当資料		構成員意見	回答・対応方針
	資料名	ページ		
左岸道路法面	資料2	2-60	<ul style="list-style-type: none"> ■ 左岸法面の先駆性樹種について、センダンが外来種に分類されるのではないか。(養父委員) 	<ul style="list-style-type: none"> ■ 別添、資料2の2-61のとおり、資料を修正
猛禽類・鳥類調査	資料2	2-73 ～ 2-78 2-83	<ul style="list-style-type: none"> ■ 猛禽類について、事業地と繁殖地には距離があり影響は小さいと予測されていたが、予測通り、大きな影響なく安定して繁殖していると考えられる。引き続きモニタリングしていただきたい。 ■ 一般鳥類について、 、 はフラッシュ放流等の影響が予測されるものの、経年変化を見る限り個体数は変動の範囲内であり、現時点で大きな影響はないと考えられる。営巣地の分布について、水没箇所以外に分散する傾向も見られているので、貯水池の出現に関わらず影響は小さかったと考えられる。今後、試験湛水により一時的に水没した営巣地に戻ってくるかなど、今後の営巣地の分布について、注視していただきたい。 ■ は安威川ダム周辺でももとの個体数が少ないので、影響を評価することは難しいが、繁殖の兆候は見られており、個体数も確認されているので、現時点での影響は小さいと考えられる。 ■ について安定繁殖まで成功し、周辺で4つがい確認されている。(布野委員) 	<ul style="list-style-type: none"> ■ 猛禽類、一般鳥類、 について、ご意見を参考に引き続きモニタリング調査を実施していく。
水質調査	資料2	—	<ul style="list-style-type: none"> ■ 貯水池の富栄養化は少しずつ進行することから、今後も注視していただきたい。(池委員) 	<ul style="list-style-type: none"> ■ ご意見を参考に、今後も定期水質調査や自動観測装置を用いた調査によって引き続き注視していく。
その他(調査全般)	資料2		<ul style="list-style-type: none"> ■ 環境DNA調査結果については、現地調査との整合性を確認していく必要がある。(池委員) 	<ul style="list-style-type: none"> ■ ご指摘の通り、引き続き、環境DNA調査を行っていく中で、現地調査の結果との照合を行っていく。
	資料2		<ul style="list-style-type: none"> ■ 安威川下流で特定外来生物のアルゼンチンアリが確認された。安威川ダムでも外来種の侵入に注意する必要がある。(上田委員) 	<ul style="list-style-type: none"> ■ 現地調査時には、安威川ダム周辺でもアルゼンチンアリが侵入していないか留意する。
フラッシュ放流効果検証調査	資料3	3-3	<ul style="list-style-type: none"> ■ 25m³/sのフラッシュ放流では、砂礫河原のどの部分が冠水し、どのエリアが冠水しないことで植生が遷移する可能性があるのか、 への影響はどの程度ありそうかを分析していただきたい。(布野委員) 	<ul style="list-style-type: none"> ■ フラッシュ放流の際は、砂礫河原において冠水する場所としない場所の植生について注目し、遷移の変化についてモニタリングし、 への影響を分析する。
	資料3	3-4	<ul style="list-style-type: none"> ■ 「砂礫河床の保全」の評価の魚類調査結果について、現在はすべての確認種数で整理しているが、この中には砂礫河床の保全で目的としている「砂礫河床を利用する魚類の産卵床や生息場の確保」の指標種としてそぐわない や などもカウントされている。ここでの評価では砂礫河床に産卵する魚類のみを整理したらどうか。(森下委員) 	<ul style="list-style-type: none"> ■ 別添、資料3の3-4のとおり、資料を修正した。
	資料3	3-26	<ul style="list-style-type: none"> ■ シノ法は荷重のばらつきや礫河原の特性(礫に到達したらそれ以上は貫入しない)の課題があり、長谷川式の貫入試験のほうが一定荷重で貫入が可能のため、検討していただきたい。(竹林委員) 	<ul style="list-style-type: none"> ■ 貫入試験の手法について、長谷川式や、山中式土壌硬度計による貫入試験など妥当な調査手法がないか改めてご相談させていただく。

項目	該当資料		構成員意見	回答・対応方針
	資料名	ページ		
	資料3	3-26	■ トラップ調査について、資料に掲載されている写真のトラップ箱は浅く、入った土砂が流出してしまうので、もう少し深いものにしたほうが良い。(竹林委員)	■ ご意見を踏まえ、トラップ調査を実施する際は、土砂が流出しない深さのトラップ箱を使用する。
環境改善放流 (土砂還元)	資料3	3-24	■ 置き土について、放流後に粗粒化した置き土を攪拌し、置き土の中央に流路を掘る事で、残った置き土が次の出水で流れやすくなる。(竹林委員)	■ 置き土について一度フラッシュ放流を行ったものについて、重機を用いた攪拌や、流路の整備等の流れやすいための工夫の実施を検討する。
環境調査計画	資料4	—	■ 令和8年度以降の長期的な調査計画の詳細についてもそろそろ検討していただきたい。(竹林委員)	■ 第3回懇話会において、令和8年度以降の、長期的な調査計画を提示する。
	資料4	—	■ 「 調査」について、調査の名称を、「 を含む蝶類調査」に変更してはどうか。(上田委員)	■ 別添、資料4の4-3、4-54、4-57、4-58のとおり、「蝶類の群集調査」を調査計画に追加した。
	資料4	—	■ 過去に安威川で非常に希少な種(底生動物やトンボ類)が確認されたが、その後確認されていない。ダム事業による影響でないことを示すためには再度確認されることが望ましく、これらの希少な種が生息しそうな場所を確認するなど、調査の方法を見直した方が良いだろう。(養父委員)	■ 現在も、調査計画で設定された調査地点の付近で希少な種が生息している可能性の高い水際部などでの希少な種の確認調査も行っており、引き続き貴重種の確認に向けて調査を継続する。